

モンゴル帝国時代のモンゴル人の命名習慣に関する一考察

エルデニバートル（内モンゴル大学モンゴル歴史学部）

〔原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）〕

モンゴル帝国の時代に、モンゴル人は征服した部落及び地域の名を自分の子供に名付ける習慣があった。『モンゴル秘史』、『元史』、『史集』などの史書を参照すれば、その現象が普遍的であることに気付くだろう。例えば、撒里答（サルタグ・回回¹）、鎖郎哈（ソランガ・高麗）、唐兀歹（タングダイ・西夏人）、忻都（印度）、囊加台（ナンギヤタイ・南宋）、蛮子台（マンジタイ・南宋人）、合失（カシ・河西）、阿速台（アスタイ）、欽察（キプチャク）、斡羅思（オロス）、馬札儿（マジャール）、阿魯渾（アルグン）、術赤台（ジュルチディ・女真人）等がそれである。本論考ではその現象の分析を試みたが、至らない点があればなんなりとご指摘いただければ幸いである。

一、撒里答（サルタグ・sartaq）

撒里答(サルタグ)という言葉は Sartaq の音訳である。また、撒里答(sartaq)は撒儿塔兀勒(サルタウレ)と訳された。モンゴル人は花刺子模(ホラズム)、不花刺(ブハーラー)、撒馬耳乾(サマルカンド)等、地域のムスリム民族の商人またはそれらの地域を撒里答(サルタグ)又は撒儿塔兀勒(サルタウレ)と呼ぶ。撒里答の語源はサンスクリット語の Sartnavaho であり、「商人」という意味である。最初はイラン語を話す現地に定着した商人に対する突厥人の呼称であり、即ち隋唐時代の「薩宝」である。突厥語の発音は「Sartaq」であり、モンゴル語では、複数形である撒儿塔兀勒(サルタウル・Sartaul)と形容詞形の撒儿塔黒台(サルタクタイ・Sartaqtai)となる。²『元朝秘史』には「撒儿塔兀勒(サルタウレ・Sartaul)」、「撒儿塔黒臣(サルタクタイ・Sartaqč'in)」等の言葉が何度も現れ、「回回(ムスリム)」と注釈が加えられている。

『秘史』 § 254: 「帖兀訥 (te'ün-ü) 豁亦納 (qoyina) 成吉思合罕 (Činggis

¹ ムスリムの略称である。また、回族とも呼ばれる。

² 「ソ連」著者：ウラジーミロヴィチ・バルトリド、訳者：羅致平、『中亞突兀史十二講』、中国社会科学出版社、1984年、第132-133ページ。『中国歴史大辞典』(遼夏金元史)、上海辞書出版社、1986年、第518ページ、周清樹による「サルタク」の項目である。

Qa'an) 撒儿塔兀勒 (Sarta'ul) 亦儿格捏 (irgen-e) 兀忽納 (Uquna) 帖里兀田 (teri'üten) 札温 (Ja'un) 額勒赤你顔 (elčin-iyen) 者惕古周 (Jetgüjü)」。

「撒儿塔兀勒 亦儿格」(サルタウル イルゲン)は「回回民(ムスリム)」と傍訳されているが、ここではホラズム人を指し、また、イスラーム教を信仰する西域人をいう。1219年から1225年まで、チンギスカンは中央アジアの花刺子模国に対し、大規模な征伐を行った。モンゴル語で「Sartaqc̣in ayan」と呼ばれる。³

撒里答(サルタグ)はよくあるモンゴル人の名字である。特に花刺子模(ホラズム)を征服した術赤(ジョチ)家族においても、その名前の付いた人は何人もいる。拔都(バトゥ)の長男の名前は撒里答(サルタグ)である。⁴貴由汗(グユク・カン)が死んだ後、撒里答は父の命令に従い、軍隊を率いて憲宗蒙哥(モンケ)を擁護した。後に、欽察汗国(キプチャク・カン国)の西側を守り、斡羅思(オロス)諸国を統率した。フランスのフランシスコ会修道士であるルブルク出身のギョームはモンゴルに赴き、拔都の長男である撒里答と何度も会った。⁵

朮赤汗(ジュチ・カン)の長男は斡儿答(オルダ)である。バルタンの長男の名前も撒儿塔黒台(サルタクタイ)である。⁶オゴデイ・カーン国時代に、第一次高麗遠征を行ったモンゴル軍隊の将軍の名前は撒礼塔(サルタウル)である。1231年、撒礼塔は命令を受け、高麗に進攻し、連戦連勝して高麗の王城に迫った。高麗の国王は使者を派遣し、講和を申し入れた。高麗の京、府、県にダルガチ(達魯花赤)七十二人を残した。⁷翌年、七月に、高麗の国王は江華島へ逃げ、モンゴルが残したダルガチを殺した。八月に、モンゴル軍が襲来した。1235年に、サルレタフは再び命令を受け、高麗を征服

³ 亦隣真、『至正二十二年蒙古文追封西丁王忻都碑』、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001年、第693ページ。

⁴ 余大鈞、周建奇訳、ラシードウッディーンが編集した『集史』第二巻、1985年、第127ページ;ボイル英訳、周良宵訳注『チンギスカンの後継者たち(『集史』第二巻)』、天津古籍出版社、1992年、第139ページ。

⁵ 『柏朗嘉賓蒙古行紀 魯布魯克東行紀』、耿昇、何高濟訳、中華書局、1985年、第313-317ページ。

⁶ 余大鈞、周建奇訳、ラシードウッディーンが編集した『集史』第二巻、第116ページ。

⁷ 『元史』卷二百八、高麗伝、第4608ページ。

し、開京（現在朝鮮開京）の處仁城を攻撃したが、高麗軍隊に射殺されてしまった。⁸

クビライ・カーンの臣下には撒儿塔黑台那顔（サルタクタイ・ノヤン）という人がいる。⁹ラシードウッディーンによれば、「阿難達（アナンダ）の臣下には撒里答という人がいて、イスラム教に反対し、大ハーンに謁見し、阿難達がよくモスクで祈りを捧げ、宴会で『コーラン』を読むと愚痴をこぼした。」という。

二、肅良合（ソランガ・Solangqa）

肅良合（ソランガ）はモンゴル人の高麗人に対する呼び方として、最初は漢字による音訳の「莎郎合思」（Solangqas、言葉Solangqaの複数形）の語で、『元朝秘史』の第274節に現れ、「高麗」と解釈された。¹⁰元王朝の後期の高麗人奇氏完者忽都（オルジェイ・クトック）は元順帝妥歡帖睦尔（トゴン・テムル）の皇后である。元六年（1340）に、皇子愛猷知理达腊（アユルシリダラ）を生んだ。こうして、モンゴルの皇族にも高麗人の血統が混じった。待望の皇子愛猷知理达腊（アユルシリダラ）を生んだから、奇氏は皇子生母として次皇后になった。至正十三年（1353）息子愛猷知理达腊（アユルシリダラ）は皇太子に冊立された。二十五年（1365）、奇氏は正皇后に昇格し、摂太尉によって、玉冊と玉宝を授けられた。冊文によれば「肅良合氏、名族の出身で、朕のそばに遣える」¹¹奇氏を皇后に冊立する勅書に「奇氏を肅良合氏に改める」¹²とある。妥歡帖睦尔（トゴン・テムル）の勅書によれば、奇氏という漢民族っぽい名前をモンゴル語の名前に改名し、それが高麗人全体の族名となり、「名族」と認定されたのである。そして、Solangqaの漢訳の字を規定した。ほかに、『元史』に皇帝が定めた族名肅良合を氏名とする、朴賽音不花（パクサイン・ブカ）という人が記載されている。彼の姓が高麗民族の姓「朴」であり、名前がモンゴル語の「サインブカ・Sain-buqa」で、いい雄牛という意味である。また、漢民族の士人を真似て徳中という字を付けた。『伝』によれば、彼は「肅良合台人」である。古代モンゴル人が氏名を述べ

8 鄭麟趾：『高麗史』卷二十三、高宗世家二。

9 余大欽、周建奇訳、ラシードウッディーンが編集した『集史』第二卷、第318ページ。

10 『中国歴史大辞典』（遼夏金元史）第337ページ、周清澍が編纂した「肅良合」という条目である。

11 原文：咨尔肅良合氏，笃生名族，来事朕躬。

12 『元史』卷一百一十四、オルジェイ・クトック皇后奇氏伝；卷46、順帝本紀、第971ページ。

る時は、族名の後に氏名と接尾語を加える。男性の氏名の接尾語は「-dai/dei」であり、女性の氏名の接尾語は「-jin」である。朴賽音不花（朴サイン・ブカ）は高麗人であるから、彼は肅良合氏-Solangqadaiである。肅良合は始め宿衛で速古ル赤（スグルチ）を担当した。速古ル赤（スグルチ）とは即ち、「内府の傘持ちを担当する怯薛執事」である。彼は奇皇后に薦められ、宿衛に務めることができ、また官利器庫提点や奇皇后が設立した資政院判官に任命され、軍事を担当する同知枢密院事に昇任された。高麗の合浦、全羅等の軍民万戸を担当し、大司農、嶺北行省平章にも任命された。至正二十四年（1364）に翰林学士承旨になった。さらに、集賢院大学士、宣政院使、中書平章政事を歴任した。二十八年、明の軍隊は大都に迫り、彼は数百人の兵士を率いて承順門を守った。城が攻め落されたため彼も捕虜になったが、降伏しないため殺されてしまった。¹³

『元史・后妃表』の記載によれば、太祖の第四斡耳朵（オールド＝君主の宮殿）には鎖郎哈（ソランガ）の妃がいる。鎖郎哈は即ち肅良合のことである。例えば、漠南五投下の亦乞列思（イキレス）部にいた建国の功労者チンギスカンの義理の弟孛秃（ボト）の曾孫の名前は鎖郎哈であり、彼の娘は武宗皇后であり、明宗の生母、順帝の祖母である。¹⁴

三、唐兀（tan γud）、合申(Qaşin)

唐兀（タングト）はモンゴル語党項という言葉の音訳である。党項人及び彼らによって建立された西夏国のことでもある。「合申」（カシ）という言葉は「河西」の発音が変化した結果であり、当時のモンゴル人は西夏のことをこういうふう呼んでいた。¹⁵『元朝秘史』の第249節によれば、「チンギスカンはそこから出発し合申の人々を征服した。」とある。オゴデイ・カーンの第五子の名前は合失（カシ）である。ラシードウッディーンによれば、「彼はチンギスカンが唐兀惕（タングート）と呼ばれる河西地域を征服した時生まれたから、カシンという名前を付けた。しかし、彼はお酒が好きで、いつも酔っていた。そういう乱暴な飲み方のせいで、オゴデイ・カーンは彼に先立たれてしまった。彼が死んだ後、合失（即ち、河西という名前）は禁じられ

¹³ 『元史』卷一百九十六『パクサインブカ』、第4435ページ。

¹⁴ 『元史』卷一百一十八『ボト伝』、第2923ページ。

¹⁵ 『中国歴史大辞典』、第414ページ、周清澍が編纂した「唐兀」という条目である。

た。これ以来、其の地域は唐兀惕と呼ばれるようになった。」¹⁶合失（カシ）の息子は海都（カイドウ）である。

四、術赤台（ジュルチェデイ・Jürcidei）

モンゴル人は女真をJürčenと呼ぶ。『元朝秘史』第247節によると、モンゴル語で「主儿扯敦」と書き、また「女真の」と解釈された。

チンギスカンの建国の功臣兀魯兀部（ウルウト部）の術赤台（ジュルチダイ、また主儿扯歹（ジュルチタイ）、術儿徹丹（ジュルチタン）、術徹台（ジュチダイ）は最初に札木合（ジャムカ）に帰順し、後に軍隊を率いてチンギスカンに帰順した。モンゴルの軍隊と克烈（ケレイト）族は哈蘭真沙陀（ハラジンサタ）で戦った。兀魯兀（クイルダル）部と忙兀（マングト）部が先頭に立ち、オンカンの子亦剌合（イチカ）を矢で撃った。モンゴルの建国当時、亦剌合（イルカ）は左手兀魯兀四千戸の担当者に任命され、チンギスカンは克烈（ケレイト）族オンカンの弟札阿紺孛（ジャア・ガンボ）の娘亦巴合別乞（イバガ・ベキ）を彼に賜った。¹⁷

五、南家台

南家台（南家思）、南家はそもそも、金朝が宋人を南家と呼んでいたことに由来する。モンゴルはその呼び方を受け継ぎ、又複数を表す語尾-sを加え、南家思と呼んだ。¹⁸チンギスカン時期の建国の功臣启昔礼（キシリク）の孫、成宗の時期の大臣哈拉哈孫（ハルガスン）の父の名前は囊加台（ナンギヤタイ）である。囊加台は「憲宗に従い、蜀を征伐し、軍隊の中でなくなった」¹⁹乃蛮（ナイマン）部人囊加歹、初任は都元帥府経歴であり、阿朮（アジュ）が宋の襄陽を包囲した際に従軍し、また丞相の伯顔（バヤン）に従い、江を渡り東へ向かい、宋朝と交渉を行った。元の軍隊は臨安（今の杭州）に迫っていた。宋朝が投降し、彼は城に入った。浙江東部の諸州県を占領し、蒙古

¹⁶『集史』第二卷、第12ページ。

¹⁷『元朝秘史』第208節。

¹⁸伯希和：『南家』、冯承鈞訳『西域南海史地考证译丛』二编、中华書国、1995年、第57ページ；『中国歴史大辞典』（辽夏金元史）第353ページ、周清澍が編纂した「南家」の条目である。

¹⁹『元史』卷一百三十六、ハラハスン伝哈拉哈孫傳、第3291。

軍副都万戸に昇任され、後に江東道宣慰使に抜擢された。²⁰伯顔の子の名前は囊加歹（ナンギヤダイ）である。²¹

六、欽察（キプチャク・Kipcak）

欽察（キプチャク）族は、元々エルティシ川流域に住んでいた。「欽察」（Kipcak）という名前は中世紀のイラン語 kip に起源し、「紅色」或は「浅い色」という意味であり、cak はすべての草原住民に対する通称である。だから、欽察の意味は「浅い色の肌を持つ草原住民」である。欽察人は「クマン人」と呼ばれていたことがある。その名前の起源はコーカシアにあるクマン川である。キプチャク族はイランと突厥の後代である。七世紀に、欽察人は突厥人に追い払われ、西へ移動した。十一世紀中頃、欽察人はボルガ流域とウクライナ草原地域に定住した。²²『元朝秘史』の記載によれば、1205年、チンギスカンはエルティシ川流域で蔑儿乞（メルキト）族の残余勢力を打ち負かし、その首領黒脱阿別乞（トクトアー・ベキ）は殺されて、その忽都（クドゥ）ら三人の息子は康里を経由し、キプチャクまで逃げた。1216年、チンギスカンは速不台（スバーテイ）にカンリン、乞ト察兀惕（キプチャク）、斡羅速惕（オロス）、馬札刺惕（マジャール）、アスなど11の国への遠征を命じた。²³オゴデイ時期、拔都（バトゥ）が統率した先鋭部隊がドナウ川まで侵攻した侵略戦争は『元朝秘史』で「Qibcaqcin ayan」と呼ばれる。²⁴拔都（バトゥ）が撒萊（サライ）で都を建て、欽察（キプチャク）草原を領地とし、欽察汗国と呼ばれた。多くの欽察人はモンゴル軍の捕虜になり、奴隷のようにこき使われた。馬乳で馬乳酒を作るから、哈刺赤（ハラチ）と名付けられた。元の世祖の時期に、首領土土哈（トトハ）は戦功を建てたから、欽察人の諸王は奴隷になる運命を免れ、軍隊に配属された。また、欽察衛親軍の都指揮使司が設置された。後に、左、右両部の龍翊護衛官を分けて、其の上に欽察親軍大都督府を設置した。²⁵オゴデイの第六子であるコデン・オグルの息子には欽察と名付けられた人がいる。²⁶

²⁰ 『元史』卷一百三十一、囊加台伝、第3184。

²¹ 『元史』卷一百二十七、顔伝、第3116ページ；冯承鈞：『元代的几个南家台』、『冯承鈞西北史地论集』、中国国際广播出版社、2013年、第185-201ページ。

²² 烏云卒力格：『喀喇沁万戸研究』、内モンゴル人民出版社、2005年、第14-15ページ。

²³ 『元朝秘史』第199節、第262節。

²⁴ 隣真前掲文、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001年、第693ページ。

²⁵ 『中国歴史大辞典』（遼夏金元史）第372ページ、周清澍が編纂した「欽察」という項目である。

²⁶ 『集史』第二卷、第21ページ。

七、阿速 (As)

阿速 (アスト)、又は阿思 (アス)、阿宿 (アシク)、阿速惕 (アスタイ) など訳された。元々、アスト人は北コーカシアに住んでいたイラン人であり、ギリシャ正教会を信じ、ダルバンデのボルガ河の川口に移住し、ビザンツ、谷儿只 (グルジ、今のグルジア)、斡魯思 (オロス) と緊密な関係を持っている。1221年、速不台 (スベータイ) などが軍隊を率いてコーカサスから、コーカサス山脈を超えて北へ進み、阿速 (アスト) 人等部族の連合軍を大敗させた。1239年、蒙哥 (モンケ) が軍隊を率いて阿速蔑怯思 (メゲス) 城を包囲攻撃した。三月、この部族を征服し、多くのアスト人がモンゴルに降伏し、勇猛なアスト軍隊を形成した。憲宗三年 (1253)、人を派遣し阿速 (アスト) 部族の戸籍調査を行わせ、七年にダルガチ (達魯花赤) をアストに駐在させた。中原に移住した阿速 (アスト) 人の多くは軍隊に入った。元九年 (1272)、阿速拔都 (アス・バートル) 軍を編成し宋を攻撃した。武宗の時期に、左、右アスト両宿衛部を設置した。²⁷モンケ・カーンの息子に阿速台 (アストタイ) という人がいる。²⁸ラシードウッディーンによれば、モンケ・カーンには「奎帖尼 (クイテニ) という妃がいて、出身は額勒只斤 (エレジギン) の部族である。モンケ・カーンと彼女の間に息子が生まれて、阿速帯 (アスタイ) と名づけられた。阿速帯 (アスタイ) は阿里不哥 (アリクブケ) と手を組んでフビライに対抗したことがあった。」²⁹

八、阿儿渾 (アルゲン・Argun)

ポール・ペリオによると、「阿儿渾 (アルゲン・Argun) は部族の名前であり、十一世紀末のKašigariが知られているArgu部族であり、現代の『黑姓乞儿吉思 (カラキラギシ・Kara-Kirghiz)』のArgin或はArgun族と関連している。」³⁰という。アルゲン人は中アジア7大河川地域からチュイ川まで、即ちキルギス共和国とカザフスタン共和国の一部の地域に住む突厥部族である。³¹

²⁷ 『中国歴史大辞典』(遼夏金元史)第353ページ、周清澍が編纂した「阿速」という項目である。

²⁸ 『元史』卷一百七、第2723ページ。

²⁹ 『集史』第二卷、第2733ページ。

³⁰ ポール・ペリオ、『荨麻林』、『西域南海史地考证译丛三编』第58ページ。

³¹ 楊志久：『元代的阿儿渾人』、『元史三論』、人民出版社、1985年、第229ページ。

旭烈兀（フレグ）の孫阿魯渾（アルゲン、1255-1291）はイルハン朝の第4代君主である。

九、斡羅思（オロス・Oros）

斡羅思（オロス）、または斡羅斯（オロス）、兀羅思（ウロス）、兀魯思（ウロス）、阿羅思（アロス）と訳され、複数の形は斡羅思惕（オラスティ）である。ボルガ川から西のモスクワとキエフ地域を指す。十三世紀に、ロシアは幾つかの公国に分けられた。1223年、モンゴル軍隊は初めてボルガ川地域で敵を撃破し、その南部に入った。拔都（バト）の西征の後、キプチャクハン国に降伏した。一部の人々が捕虜になり、奴隷としてモンゴルと中原地域に連れていかれた。順元年（1330）に、「宣忠扈衛親軍都万戸府を設置し、官位は正三品であり、斡羅思（オロス）の軍隊と兵士を統率し、枢密院に従属する」。十二月、一万の斡羅思（オロス）人を集めるように命じられ、百頃の田地を賜り屯田させた。翌年の四月に、万戸府を宣忠扈衛親軍都指揮使司に変えた。（『元史』巻34、35、文宗紀三、四；巻100、兵志三、屯田）

海都（カイドゥ）と妻迭連臣（ディレンチン）の間に生まれた息子の名前は斡羅思（オロス）である。ラシードウツディーンによると「ハトと境を接する地域をオロス（斡羅思）に渡し、彼に大きな軍隊を託した。」という（『集史』第二巻、第16ページ）

十、馬札儿（マジャル）

馬札儿（マジャル）、または馬扎（マジヤ）、馬茶（マチャ）、馬劄（マジヤ）、馬札刺（マジヤール）と訳される。即ち現在のハンガリーである。1241年春に、拔都（ハドゥ）兄弟、速不台（スブタイ）などが率いるモンゴル軍が馬札儿（マジャル）を攻撃した。間もなく、モンゴル軍が首都ペスト（Pest）の近くにきたため、馬札儿軍が出兵したが大敗した。十二月、拔都が軍隊を率いてトナ川（ドナウ川）を渡り、グラン(Gran)城を占領した。篋里乞氏（メルキド部）伯顔（バヤン）の弟である馬札儿台（マジャルダイ、1285-1347）は武宗、仁宗に仕えた。泰定四年（1327）、陝西西行台治書侍御史を担当し、また兵部尚書、御史大夫、知枢密院事等を歴任した。元三年に至り（1337）、太保と任命され、枢密院に配属され、北方を鎮守した。六年にバヤンについて右丞相を担当した。（『元史』巻138、第1337ページ、馬札儿台伝。）

十一、忻都(Hindu)

忻都という言葉は印度のことをさす。『元朝秘史』第261、264節で忻都思(-sは複数を表す語尾である)と表示されている。³²

チンギスカンと彼の子孫たちによって行われる大規模な対外征服戦争において、漢、女真、西夏、高麗、欽察、阿速(アスト)、斡魯思(オロス)など諸民族および国家から大量の人口がモンゴル地域に移され、後にその大部分がモンゴル人に同化した。モンゴル帝国の時期に、モンゴル人がいつもほかの民族や部族の名前を自分の子供の名前にする現象から、これらがモンゴル人と付き合い、触れ合ってきた歴史が伺える。

モンゴル帝国時期以後、モンゴル民族に融合したあらゆる民族と国家の名前もだんだんモンゴル部族や氏族の名称へ変わっていく。³³17世紀のモンゴル語文献の中に、肅良合(ソランガ)、撒儿塔兀勒(サルタウル)哈刺沁(ホルチン)、阿速(アスト)等の部族が現れる。例えば、サガンセチェン『モンゴル源流』に「肅良合」の記載が何箇所もある。

(一)己未年(1433)、太松吉台(タイスン・タイジ)は自分を太松合罕(タイスン・カーン、漢籍のトクトアー・ブカ・カン)に立てて、自分の弟アヘバルジ(阿黒巴儿只)にジノンという称号を与え、四瓦刺部(オイラト部)へ出征した。瓦刺側も阿ト都刺・扯臣(アブドゥッラー・セチェン)を阿黒巴儿只(アクバルジ)のところへ派遣し、彼とその兄太松の間にもめ事を起こさせようとした。其の夜に、(アクバルジ・阿黒巴儿只)は肅良合人(Solongoqas)忽都巴哈(クト・ブカ)、火你赤兀氏猛可(コニチ・グシ・モンケ)二人を阿ト都刺・扯臣(アブドゥッラー・セチェン)に同行させ、一緒に帰らせ、四瓦刺部と手を組んだ。³⁴

³²隣真前掲文、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001年、第690ページ。

³³烏蘭：『关于蒙古人姓氏』、『蒙元史暨民族史论文集-纪念翁独健诞辰一百周年』、社会科学文献出版社、2006年、第102-103ページ。

³⁴烏蘭：『「モンゴル源流」研究』、遼寧民族出版社、2000年、第273ページ。

(二) 阿黒巴儿只 (アクバルジ) が即位し、大ハーンとなったが、彼と彼の息子哈儿忽出黒 (ハルグチュク) は相次いで瓦剌人に殺された。瓦剌の先汗 (エセン・ハーン) の娘薛扯克 (セチェク) 妃子は哈儿忽出黒 (ハルグチュク) の妻であり、妊娠七ヶ月であった。薛扯克 (セチェク) 妃子が息子を生むと、殺されるため、薛扯克 (セチェク) 妃子は男の子を生んで、先汗 (エセン・ハーン) の祖母撒木儿 (サムル) 公主のところに送った。撒木儿 (サムル) 公主は彼を伯顔・猛可 (バヤン・モンケ、即ち、モンゴル語史書の中でダヤン・ハーンの父である) と名付けて、肃良合人桑哈勒都儿 (サンガルドル) の妻哈喇黒臣 (ハラグチン) 太夫人が彼を育てた。³⁵

(三) 太松合罕 (タイスン・ハーン) の息子莫蘭台吉 (モーラン・タイジ) はモーリハイ王に擁護され、大ハーンを即位した。肃良合人忽都巴哈 (クトラバハ) はモーラン・ハーンところで、「モーリハイ王は蛮地の王妃と共謀し、軍隊を率いてあなたを征伐しようとしてた。」また、モーリハイ王のところで、「モーラン・ハーンがあなたを殺そうとした。」と告げた。両者の間で揉め事を引き起こし、結果としてモーラン・ハーンが戦敗し、殺された。真相を知ったモーリハイ王は忽都巴哈 (クトラバハ) の舌を切って殺した。³⁶

³⁵ 同上、第 277 ページ。

³⁶ 同上、第 280 ページ。